

# 青年期の両親への信頼感・性別が対人欲求 及び同調行動に与える影響について

## —大学生を対象に—

田 村 茉 菜

### 要 約

“重要な他者”＝母親とした研究が多いが、父親との関係性も青年期の子どもたちに何らかの影響を及ぼすのではないかと考え、本研究では、大学生を対象に、青年期の両親への信頼感がどのように心理的側面・行動的側面に影響するかについて、対人欲求及び同調行動との関連から検討し、その際性別による影響も検討した。

結果、「仲間への同調」に及ぼす影響として、男子は「賞賛欲求」に正の有意値、女子は「回避欲求」に負の有意値がみられ、「自己犠牲・追従」に及ぼす影響として、男子は「賞賛欲求」に負の有意値がみられ、女子は「賞賛欲求」の関与がみられなかった。また、男子の両親への高い・低い信頼感は「仲間への同調」を取る際、「賞賛欲求」の関与をなくし、女子の両親への高い信頼感は「仲間への同調」を取る際、「賞賛欲求」に負の有意値を生じさせ、「回避欲求」の関与をなくすことがわかった。さらに、「自己犠牲・追従」を取る際、男子の両親への高い信頼感は「賞賛欲求」「迎合欲求」の関与をなくすこと、低い信頼感は「賞賛欲求」の関与をなくすことがわかった。女子の両親への高い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際、「迎合欲求」の関与をなくすことがわかった。このことか

ら、両親への信頼感や性別が対人欲求及び同調行動に影響を及ぼすことがわかった。

キーワード：青年期、両親、信頼感、対人欲求、同調行動

### 1. 問 題

#### 1. 現代青年の友人関係

青年期の友人関係は、青年を支えるだけでなく、親からの自立を促す役割もあり、青年の成長とともに変化していく関係である。友人を強く希求する青年期は、友人関係に関する悩みが増える時期でもある。第2次性徴などを伴う急激な心身の変化そして親からの独立というのは、不安や恐れを伴う。そのため、青年には悩みや考えを語り合う友人が必要となると考えられる。

大鷹・菅原・熊谷(2009)は、青年期の対人関係は、少子化と核家族化が進行したことで急激に希薄化・表面化したと示唆した。友人関係が深まると開示する情報量は多くなるだけでなく、そのレベルは深くなっていく。さらに、一方が自己開示することによって、他方はそれと同じ量・レベルの自己開示を行わなくてはならない。このことを、「自己開示の返報性」という。松永・岩本(2008)によると、1980年代

\*臨床心理学研究科 博士課程(前期)

半ば以降の青年期の友人関係のあり方は、自分自身の内面を開示するような関わりを避け、互いに傷つけあわないよう、表面的な楽しさの中で群れ、関係の深まりを避ける傾向が示唆されたという。

しかし、その後の研究において現代青年の友人関係は、全体的に「希薄化」しているのではなく、場面に応じて選択的に使い分けているということが明らかとなった（泉水・小池, 2011）。つまり、「友人との関係はあっさりしてお互いに深入りしない」といった表面的な関わり行動の一面と、「意見が合わなかったときには納得がいくまで話し合いをする」といった積極的な関わり行動の一面があるように、友人関係の中に「希薄」なものや「親密」なものとの混在しているのである。このことから、現代の青年の友人関係において、友人関係の深さと自己開示の深さがあまり関連しなくなってきたといえる。また、現代では他者と出会い、関係を維持する機会が多様となったため、その場の文脈によって付き合い方を選択的に使い分けるよう変化しているのである。

しかしながら、友人関係は青年期において重要であり、社会化に影響を及ぼすといわれている（泉水・小池, 2011）。その機能として、「安定化」「社会的スキルの学習」「モデル」がある。「安定化」とは、悩んだときに話や相談を聞いてくれる友人の存在が精神的安定をもたらす、自我を支える機能である。「社会的スキルの学習」とは、友人との付き合い方を通して他者と良い関係を構築するための接し方を学習する機能である。「モデル」とは、友人から新しい考え方や生き方を学ぶことによって自己の人生観や価値観を広げ、尊敬や憧れから友人をモデルとする機能である。

さらに、青年期の友人関係は、精神的健康や学校適応との関連も示唆されている（中間, 2014）。このことから、青年期において友人関係はなくてはならないものといえる。

## 2. 基本的信頼感

子どもたちが健全な学校生活を送っていくためには親などの“重要な他者（significant other; Sullivan, 1953）”との間に基本的信頼感（Erikson, 1963）を形成していることが必要であると考えられる。基本的信頼感とは、Erikson（1963）によって提唱された「生後1カ年の経験から獲得される自分自身と世界に対する1つの態度のことであり、他人に対しては一般に筋の通った信頼を、自分自身に対しては信頼に値する感覚のこと」である。つまり、信頼感の原点は、必要な物を供給してくれる外的存在が常に同じで安定しており、連続性を有していること、そして様々な衝動に対処する自己の適応能力を信頼することといえる。また、菅原ら（2005）の研究から、他者に対する安定した信頼感の形成が自己に対する信頼に繋がるといった、信頼感獲得の順序も指摘されている。

基本的信頼感とは、乳児期に形成され、思春期・青年期以降にも大きな影響を及ぼす。このことを内的作業モデル（Internal Working Model）という。内的作業モデルとは、乳児と養育者との関係の中で内在化されてできるモデルのことであり、他者との関係に関する一般的イメージである。そして、これらのモデルを現実世界のシミュレーションモデルとして使用することによって、外界からの情報を処理し生活上の様々な出来事を認知、安全感を得るのに有効な自分の行動プランを作成する。また、各個人が持つ内的作業モデルの様式に対応した行動スタイルが対人場面で現れることがこれまでの研究によって明らかにされてきた。

“重要な他者”との信頼関係が自尊心や孤独感、人生における満足感、ディストレスとの深い関係があることは多くの研究から示されている（金政, 2007; 丹波, 2005）。例えば、Bowlby（1976）の愛着理論では、乳幼児期に親との関係が適切で応答的な関係であるほど、その時期やその後の精神的な安定性が高いことが示されている。また、児童期に親との関係において暖かさの欠如が成人期の孤独感をもたらすといっ

た研究結果もある(浜崎ら, 2012)。したがって、親などの“重要な他者”との信頼関係が子どもの精神的健康や社会適応にとって重要であることがいえる。

### 3. 父親に関する研究

父親に関する研究は、母親研究に比べまだまだ少ない。橋本(2010)は、大学生における父親との愛着関係を研究したところ、父親との愛着関係の高い群は情緒が安定し社会スキルも高く、低い群は情緒不安定で自己中心的傾向があり、問題行動を起こしやすいことが示唆された。また、小林(2011)は、両親による養育態度の影響について研究したところ、父親の統制的な養育態度が自身・自律性の追求を直接低下させる傾向があり、無関心な態度は自己有用感を低下させる傾向があることがわかった。このような結果から、父親といった“重要な他者”との関係が子どもの精神的健康や社会化にとって重要といえる。

### 4. ソーシャルスキル

ソーシャルスキル(社会的スキル)とは、良好な人間関係を形成し、維持していくための人間関係に関する知識、そして具体的な技術・コツの総称のことである。ソーシャルスキルは、性格のような先天的なものではなく、生後の経験を元に後天的に習得されるものである。従って、ソーシャルスキルは学習を通じ獲得される行動であるといえる。

ソーシャルスキルを獲得する(学習する)場面には、家庭や学校など様々あると考えられているが、その中でも家庭は重要な場面といえる。なぜならば、子どもは家族という集団の中で親の行動を観察・モニタリングをし、親からのしつけを通じ基本的なソーシャルスキルを獲得するからである(青木ら, 2007)。

大鷹ら(2009)によると、母親の拒否的な養育態度は、子どものソーシャルスキルの獲得を低くし、罪や脅しを用い社会的行動をとらせようとする養育態度は子どもに恐怖心や怒りを引

き起こし、向社会的行動を育てないと報告し、母親の養育態度→内的作業モデル→ソーシャルスキルというモデルを探索的に支持した。また、青木ら(2007)の研究では、母親の積極的拒否傾向が強いほど、家庭における社会的スキル(関係向上行動、関係参加行動)の獲得が少ないこと、そして家庭における社会的スキルが学校における社会的スキル(関係向上行動、関係参加行動)に影響を与え、学校における社会的スキル(関係向上行動、関係参加行動)がクラス内地位を高めるよう機能していることを明らかにした。このような結果から、親などの“重要な他者”との関わりの中での養育態度は、ソーシャルスキルに影響を与えると見える。

### 5. 対人欲求

渡部(1999)は、我々の対人関係の背景には「他者から賞賛されたい欲求」「他者から拒否されたくない欲求」「他者との関係を回避する欲求」といった3つの異なる対人欲求を想定する必要があると述べた。また、渡部(1999)は、「賞賛されたい欲求」の強い者は積極的に行動し他者の注目を集めることによって、「拒否されたくない欲求」の強い者は個性を殺し周囲との軋轢を最小限にすることによって、集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとし、「回避したい欲求」の強い者は他者からの積極的な拒絶や批判を回避し自己を防衛していると述べている。

田島・山崎・岩瀧(2015)は、対人欲求と社会的スキルや認知された対人的コンピテンスの関係を検討した。その結果、社会的スキルや対人的コンピテンスが高いと認知している人は他者から賞賛されたい欲求が強く、逆に社会的スキルや対人的コンピテンスが低いと認知している人は他者との関係を回避する欲求が強く、他者から拒否されたくない欲求をもつ人はその中間に位置することがわかった。つまり、他者から賞賛されたい欲求の強い人は、対人場面で自己顕示的に行動することで、自己の存在を集団の中に確保しようとすると考えられる。また、

他者との関係を回避する欲求の強い人は他の2つの欲求の強い人と比べ、社会的スキルが最も低く、対人的コンピテンスも低いと認知しているため、対人関係を回避することで自己防衛をするのに対し、他者から拒否されたくない欲求の強い人は対人関係を維持しようとする欲求をもち、実際に対人関係を維持することが可能であることが示唆された。このことから、養育態度が影響を与えるソーシャルスキル（社会的スキル）は、対人欲求との関連があるといえる。

## 6. 同調行動

同調行動とは、「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められた時、迷いながらも周囲の意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」のことである。五十嵐ら（2014）や葛西・松本（2010）によると、同調には内心から他者の意見・行動を受け入れる「内面的同調」、表面的には同調しているが内面では異なっている「表面的同調」があるという。また、同調行動の効果には、社会的な適応の促進や、集団との葛藤を回避することによる内的緊張の低減といったポジティブな側面と、内心の自己意見と集団意見に同調して呈示した自己意見との間に葛藤が生じ、ストレスフルな状態を招くというネガティブな側面があるという。

田島ら（2015）の研究から、対人欲求の「賞賛」は、同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示し、対人欲求の「非拒否」「回避」は、同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。この結果から、他者から賞賛されたい者は積極的に仲間と同調する行動をとることが多く、他者から拒否されたくない者・他者との関係を回避する者は自分を抑えて仲間と同調する行動をとるといえる。また、対人欲求の得点を平均値で高群、低群に分類し同調行動得点を比較した結果、対人関係において「他者から褒められたい」と意識する者の方が、積極的に仲間と同じ行動をとりたいという意識が高く、対人関係において「拒否されたくない思いが強い者・他者との関係を回避する者」の

方が、自己を犠牲にし、積極的に周囲に同調する傾向が高いことがわかった。つまり、対人関係において「他者から褒められたい」と考える者は、積極的に仲間と同じ行動をとるが自己を犠牲にする傾向が低く、「他者から拒否されたくない」と考える者は、自分を抑え積極的に仲間と同じ行動をとる傾向があり、「他者との関係を回避する者」は、自己を犠牲にし仲間と同じ行動をとる傾向があるといえる。このことから、対人欲求は同調行動との関連があるといえる。

## II. 本研究の目的

親への信頼感が及ぼす影響はこれまでの研究で多くなされているが、その大半が母親、心理的側面（自尊心・孤独感等）に関するものである。しかしながら、同調行動と関連のある心理的側面の対人欲求と親への信頼感との関連を検討した研究はあまりない。

よって、本研究において、両親への信頼感や性別が現代青年の心理的側面の対人欲求、行動的側面の同調行動にどのような影響を及ぼすのか検討する。仮説として以下のことを挙げる。

### 仮説1

男女における母親・父親への信頼感の高さは、対人欲求の「賞賛」を生じさせ、同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼす。

### 仮説2

男女における母親・父親への信頼感の低さは、対人欲求の「非拒否」を生じさせ、同調行動の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼす。

## III. 方法

### 1. 研究対象

東京国際大学に通う大学生の男女を対象とし、男子76名、女子82名の計158名の質問紙を得た。そのうち不備回答を除いた、男子63名、女子74名の計137名の有効回答を得た。

## 2. 調査期間

2015年7月から10月に実施した。

## 3. 調査形式

本調査は講義時間内に教室で行い、受講している学生に質問紙を配布し、集団法の形式で実施した。回答時間は15分程度であった。

## 4. 質問紙の構成

### (a) フェイスシート

調査の目的、諸注意、筆者の連絡先等を明記し、回答者には性別、年齢、学年の記入を求めた。

### (b) 親子間の信頼感に関する尺度

酒井（2005）が作成した親子間の対人的信頼感を測定する尺度。子どもが母親・父親への信頼感を評定するものと、母親・父親が子どもへの信頼感を評定する2種類から構成されているが、子ども用の高校生以上版を用いる。母親・父親との関係における質問がそれぞれ8項目からなり、「4:あてはまる」「3:ややあてはまる」「2:あまりあてはまらない」「1:あてはまらない」の4件法での回答を求めた。

### (c) 対人欲求尺度（渡部，1999）

渡部（1999）が作成した、「賞賛」「非拒否」「回避」の3因子26項目で構成された尺度。「5:とてもあてはまる」「4:あてはまる」「3:どちらともいえない」「2:あてはまらない」「1:まったくあてはまらない」の5件法での回答を求めた。

### (d) 同調行動尺度（葛西・松本，2010）

葛西・松本（2010）が作成した同調行動尺度を大学生向けに語句を変更し使用した。表現の変更の際は、大学院生数名で検討をした。「仲間への同調」「自己犠牲・追従」の2因子22項目で構成されている。「5:とてもあてはまる」「4:あてはまる」「3:どちらともいえない」「2:あてはまらない」「1:まったくあてはまらない」の5件法での回答を求めた。

## IV. 結果

### 1. 信頼性の検討と因子構造の確認

#### A. 親子間の信頼感に関する尺度

青年期の子ども本人が母親・父親それぞれとの関係における信頼感を評定するために、酒井（2005）が作成した親子間の信頼感に関する尺度子ども用高校生以上版を使用した。

母親・父親との関係における質問が8項目からなり、「4:あてはまる」「3:ややあてはまる」「2:あまりあてはまらない」「1:あてはまらない」の4件法での回答を求めた。

尺度の構造を確認するため主成分分析を行ったところ、母親に抱く信頼感尺度に関しては、第1成分の寄与率が62.86%と高く次元性のもので解釈した。父親に抱く信頼感尺度についても同様に次元性が確認され、寄与率は68.81%であった。両尺度における項目の内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、母親に対するもので $\alpha = .91$ 、父親に対するもので $\alpha = .93$ であった。そのため、これ以降の分析では被験者が母親・父親に抱く信頼感として各8項目を加算した得点を、青年期の子どもが母親に抱く信頼感尺度の得点、子が父親に抱く信頼感尺度の得点とした。

#### B. 対人欲求尺度

対人欲求を測定するために、渡部（1999）が作成した「賞賛」「非拒否」「回避」の3因子26項目で構成され、5件法で回答を求める尺度を使用した。

26項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った結果、先行研究と同様の3因子構造が得られた（Table. 1）。また、因子負荷量が.35以上のものが25個抽出されたので、それを採用した。.35未満の項目は、項目21「断られるのが心配なので、誰かに頼みごとをあまりしたくない」の1つであった。それぞれの因子における $\alpha$ 係数に関しても、.73～.88の値が得られたため、使用に十分と判断した。

第1因子は10項目で構成 ( $\alpha = .88$ ) されており、「何か気の利いたことを言って人を感心させたい」、「みんなの注目をあびたい」、「社会で高く評価されるようなことをしたい」など他者からの賞賛を得たいという欲求を捉える項目群から構成されているため、先行研究と同様「賞賛欲求」と命名した。第2因子は11項目で

構成 ( $\alpha = .82$ ) されており、「例えば人から批判される可能性の高いいざごごのような場面には、最初からなるべく近づきたくない」「自分を嫌っている人とはなるべく顔を合わせたくない」など他者との関係を回避したいという欲求を捉える項目群から構成されるため「回避欲求」、第3因子は4項目で構成 ( $\alpha = .73$ ) され

Table. 1 対人欲求の因子分析の結果 (主因子法・Promax回転)

項目	負荷量
<b>第1因子 賞賛欲求(<math>\alpha = .88</math>)</b>	
5. 人に自分を印象づけたい	.79
3. 何か気の利いたことを言って人を感心させたい	.75
2. みんなの人気者になりたい	.71
8. みんなの注目をあびたい	.69
10. みんなから尊敬される人になりたい	.69
9. 社会で高く評価されるようなことをしたい	.67
4. 自分の得意なこと(例:勉強、スポーツ)をまわりの人に見てもらいたい	.64
1. 有能な人間だと、まわりから認められたい	.60
1. 人前ではいつもかっよよくありたい	.53
26. みんなに喜んでもらえる素晴らしいことをしたい	.51
<b>第2因子 回避欲求(<math>\alpha = .82</math>)</b>	
19. 例えば人から批判される可能性の高いいざごごのような場面には、最初からなるべく近づきたくない	.68
22. 何かにつけて批判するような人たちとのつきあいは、できるだけ避けたい	.68
25. 自分を嫌っている人とはなるべく顔を合わせたくない	.57
11. 人と深く関わるほど自分の嫌な部分を相手に知られそうで、積極的に人と深く関わりたいとは思わない	.56
14. 人の批判めいたことはあまり言いたくない	.55
16. 出来るだけ敵は作りたくない	.50
12. 誰からも嫌われたくない	.47
13. 人の感情を害しないかと心配なので、他の人の言うことに強く反論することはしたくない	.43
24. 一緒にどこかに行こうと誘っても断られたら、もう一度誘ってみる気にならない	.43
23. 人からの拒否や批判を避けるためには、たとえ人とあまり関わるのが出来なくなってもしょうがない	.42
2. どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	.42
<b>第3因子 迎合欲求(<math>\alpha = .73</math>)</b>	
20. 自分を変える努力をしても周囲の人と上手くやっていきたい	.74
15. 自分がしたいように行動するよりも、周囲の人から好まれるよう行動したい	.72
18. 自分の考えよりも自分の所属する集団の和を優先させたい	.62
17. みんなから変な人だと思われたくない	.54
累積寄与率(%) 第1因子	24.96
第2因子	39.83
第3因子	46.76

ており、「みんなから変な人だと思われたくない」、「自分の考えよりも自分の所属する集団の和を優先させたい」など他者から拒否されたくないという欲求を捉える項目群から構成されているため、「迎合」と命名した。

### C. 同調行動尺度

同調行動を把握するために、葛西・松本(2010)が作成した「仲間への同調」「自己犠牲・追従」の2因子22項目で構成され、5件法で回答を求める尺度を使用した。同調行動尺度の項

目内用を一部改変(例:「4. クラスや部活動などでみんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる」→改変後:「4. 学部・学科やサークル・部活動などでみんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる」)して質問紙調査を行ったことから、再度因子構造の確認を行った。

22項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った結果、2因子構造が得られた(Table. 2)。また、因子負荷量が.35以上のものが20個抽出されたので、それを採用した。.35未満の項目は、項目19「一人であると

Table. 2 同調行動の因子分析の結果 (主因子法・Promax回転)

項目	負荷量
<b>第1因子 自己犠牲・追従(<math>\alpha=.82</math>)</b>	
7. 自分の考えや意見を言うのを抑える	.80
4. 学部・学科やサークル・部活動などでみんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる	.74
17. 多くの場合、人と議論するより、相手に従う	.69
5. 自分の意見を主張するより相手の考えや意見を聞く	.57
2. あまり目立つようなことはしたくない	.49
1. みんなと同じようにしようと思う	.51
3. 人と違ったことはしないでおこうと思う	.49
18. 友達に嫌な思いをさせてまで、自分の意見を通したくない	.46
6. いじめの場面を目撃しても、「いけないこと」とは思いながらも傍観者になってしまうことがある	.45
11. 何かをするとき、みんなと一緒にだと安心する	.43
<b>第2因子 仲間への同調(<math>\alpha=.80</math>)</b>	
12. 親しい友達と同じような格好や行動がしたい	.81
15. 私は、私の友だちがすることを私もする	.79
8. 友だちがブランド品・流行の商品などを持っていると、自分もほしくなる	.59
16. 友だちに、自分の味方になってくれるよう頼むことが多い	.53
21. 友だちとは趣味や好みが一致していてほしい	.50
14. 出来るだけ仲間と同じように行動したい	.50
20. 流行遅れになるのは嫌だ	.48
10. 何かを決めるときには誰かに相談する	.40
13. 自分で決断することは嫌いだ	.38
9. 話題になっているTVや漫画・小説などは見たり読んだりする	.38
累積寄与率(%)	第1因子 27.59
	第2因子 39.72

何となく不安で心細くなる」, 項目22「嫌だと思ってもその意見に従うことがある」の2つであった。それぞれの因子における $\alpha$ 係数に関しても, .80～.82の値が得られたため, 使用に十分と判断した。

第1因子は10項目で構成されており, 「自分の考えや意見を言うのを抑える」, 「人と違ったことはしないでおこうと思う」など自分を犠牲にしてでも友人に合わせようとする結果であったため「自己犠牲・追従」と命名した。第2因子は10項目で構成されており, 「親しい友達と同じような格好や行動がしたい」, 「友だちとは趣味や好みが一致してほしい」など積極的に他者と同じ行動を取りたいという思いからきている結果であったため「仲間への同調」と命名した。

## 2. 各尺度別性差の検討

### A. 親への信頼感

男女によって, 親への信頼感得点に差があるか検討した (Table. 3)。その結果, 父親信頼得点に有意な差は見られなかったが, 母親信頼得点には男女で有意な差 ( $t(135) = 3.35, p < .001$ ) が見られ女子の方が男子に比べ母親信頼得点が高かった。

Table. 3 親への信頼感による男女の $t$ 検定結果

	男子		女子		$t$ 値	比較
	$M$	SD	$M$	SD		
母親信頼得点	21.4	5.38	24.7	5.37	3.54***	男子<女子
父親信頼得点	21.3	5.53	20.4	6.64	.840	

\*\*\* $p < .001$

Table. 4 対人欲求の諸変数による男女の $t$ 検定結果

	男子		女子		$t$ 値	比較
	$M$	SD	$M$	SD		
賞賛	30.9	7.18	31.8	7.00	.716	
回避	35.3	7.18	38.7	5.76	3.06**	男子<女子
迎合	11.8	3.43	13.0	2.60	2.23*	男子<女子

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

### B. 対人欲求

下位尺度別に尺度を構成する項目の得点を加算し尺度得点を算出した後, 男女によって対人欲求の諸変数の得点に差があるか検討した (Table. 4)。

その結果, 賞賛に有意な差は見られなかったものの ( $t(135) = .716, n.s.$ ), 回避 ( $t(135) = 3.07, p < .01$ ), 迎合 ( $t(135) = 2.24, p < .05$ ) において男女で有意な差が見られ, 共に女子の方が男子に比べ回避, 迎合の得点が高かった。

### C. 同調行動

下位尺度別に尺度を構成する項目の得点を加算し尺度得点を算出した後, 男女によって同調行動の諸変数の得点に差があるか検討した (Table. 5)。

その結果, 仲間への同調に有意な差は見られなかったが ( $t(135) = .834, n.s.$ ), 自己犠牲・追従において有意な差 ( $t(135) = 2.44, p < .05$ ) が見られ, 女子の方が男子に比べ自己犠牲・追従の得点が高かった。

以上の結果から, 女性は男性に比べ母親への信頼が高く, 他者との関係を回避したいが関係を持つ際は自分を抑え他者の言うとおりに行動をとる傾向が高いといえる。このような結果

は、山本ら（2008）が示す、女性のほうが男性に比べ母親との結びつきが強く、甘えや親和傾向があるが故に他者からの傷つきへの耐性が弱く心を開くことに不安があると考えられる。このような不安から、女性は他者との関係を回避する傾向や他者の気に入るように調子を合わせる傾向が高くなり、自分を抑え他者の言うとおりに行動しやすいと推測される。この事実を明らかにするため、以下のような検討を行った。

### 3. 対人欲求と同調行動の関連

被験者全体を対象とした対人欲求と同調行動の関連について検討を行うため、まず、下位尺度別に尺度を構成する項目の得点を加算、尺度得点を算出し、相関分析を実施した（Table. 6）。

対人欲求の「賞賛」は、同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示した。また、対人欲求の「回避」「迎合」は、同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

対人欲求が同調行動に及ぼす影響をより具体的に検討するため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「回避」「迎合」を独立変数、同調行動の2つの下位尺度である「仲間への賞賛」

「自己犠牲・追従」を従属変数としたステップワイズ重回帰分析を行った（Table. 7, Figure. 1）。

①同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求「迎合」においてのみ有意であり、 $\beta$ （標準化偏回帰係数）は正に有意な値（ $\beta = .55, p < .001$ ）であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .30$ であり、有意であった（ $F(1, 135) = 59.1, p < .001$ ）。

②同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求「賞賛」の $\beta$ （標準化偏回帰係数）は負に有意な値（ $\beta = -.17, p < .05$ ）であり、対人欲求「回避」の $\beta$ （標準化偏回帰係数）は正に有意な値（ $\beta = .39, p < .001$ ）であった。また、対人欲求「迎合」の $\beta$ （標準化偏回帰係数）は正に有意な値（ $\beta = .43, p < .001$ ）であった。したがって、同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は、対人欲求「賞賛」「回避」「迎合」において有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .46$ であり、有意であった（ $F(1, 133) = 37.4, p < .001$ ）。

この結果から、以下のことが解釈できる。他

Table. 5 同調行動の諸変数による男女のt検定結果

	男性		女性		t 値	比較
	M	SD	M	SD		
仲間への同調	26.1	5.92	27.0	6.05	.834	
自己犠牲・追従	31.1	6.17	33.4	5.15	2.44*	男性 < 女性

\* $p < .05$

Table. 6 対人欲求と同調行動の相関係数（被験者全体）

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.24**	.23**	.18*	.02
回避		—	.48**	.19*	.55**
迎合			—	.55**	.58**
仲間への同調				—	.41**
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table. 7 対人欲求と同調行動の関連 (被験者全体)

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調			.55***	.30***
自己犠牲・追従	-.17*	.39***	.43***	.46***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

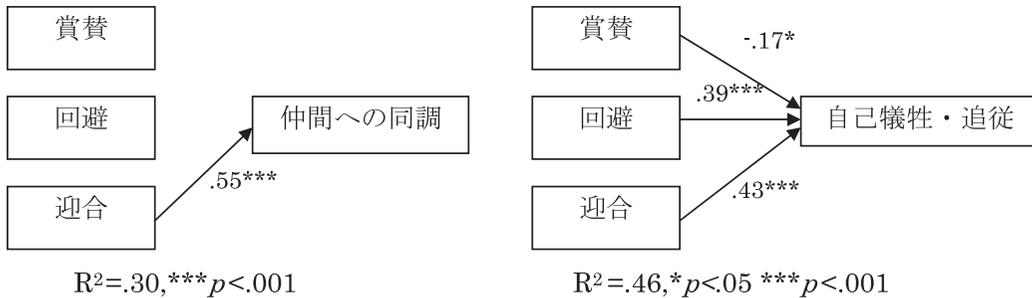


Figure. 1 対人欲求と同調行動の関連 (被験者全体)

者の気に入るように調子を合わせたい傾向が強い場合は、積極的に仲間と同じ行動をとる傾向が高いと考えられる。また、対人関係において他者から褒められたい欲求が弱く、他者との関係を回避したい欲求や他者の気に入るように調子を合わせたい傾向が強い場合は、自分を抑え他者の言うとおりに行動をとる傾向が高いと考えられる。対人欲求と同調行動に関連が見られたことから、性別による影響は見られるのか検討を行った。

#### 4. 性別と対人欲求及び同調行動の関連

各尺度別性別差の検討において、女性は男性に比べ対人欲求の「回避」「迎合」、同調行動の「自己犠牲・追従」が高かったことから、性別によって対人欲求及び同調行動の関連に違いがあるのか検討するため、男女別に相関分析を実施した (Table. 8)。男子において、対人欲求の「賞賛」は同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示した。また、対人欲求の「回避」「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

女子において、対人欲求の「回避」は同調行

動の「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。また、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

性別によって対人欲求が同調行動に及ぼす影響をより具体的に検討するため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「回避」「迎合」を独立変数、同調行動の2つの下位尺度である「仲間への賞賛」「自己犠牲・追従」を従属変数としたステップワイズ重回帰分析を行った (Table. 9, Figure. 2)。

##### ①同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

男子において、対人欲求の「賞賛」において有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に有意な値 ( $\beta = .25, p < .05$ ) であった。また、「迎合」においても有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に有意な値 ( $\beta = .59, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .48$  であり、有意であった ( $F(2, 60) = 28.1, p < .001$ )。女子においては、対人欲求の「回避」において有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に有意な値 ( $\beta = -.22, p < .05$ )

Table. 8 対人欲求と同調行動の相関 (男女別)

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.13	.26*	.40**	-.14
回避		—	.56**	.40**	.65**
迎合			—	.65**	.59**
仲間への同調				—	.45**
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

女子	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.34**	.18	-.01	.17
回避		—	.32**	-.06	.38**
迎合			—	.45**	.51**
仲間への同調				—	.37**
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table. 9 対人欲求と同調行動の関連 (男女別)

男子	独立変数			
	賞賛	回避	迎合	R <sup>2</sup>
仲間への同調	.25*		.59***	.48***
自己犠牲・追従	-.31***	.45***	.42***	.59***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

女子	独立変数			
	賞賛	回避	迎合	R <sup>2</sup>
仲間への同調		-.22*	.52***	.25***
自己犠牲・追従		.25*	.44***	.32***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

であった。また、「迎合」においても有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に有意な値 ( $\beta = .52, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .25$  であり、有意であった ( $F(2, 71) = 11.5, p < .001$ )。したがって、同調行動「仲間への同調」に及ぼす影響は、男子は対人欲求の「賞賛」「迎合」、女子は対人

欲求の「回避」「迎合」において有意であるといえる。

②同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

男子において、対人欲求の「賞賛」の  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に有意な値 ( $\beta = -.31, p < .001$ ) であり、対人欲求の「回避」の  $\beta$  (標

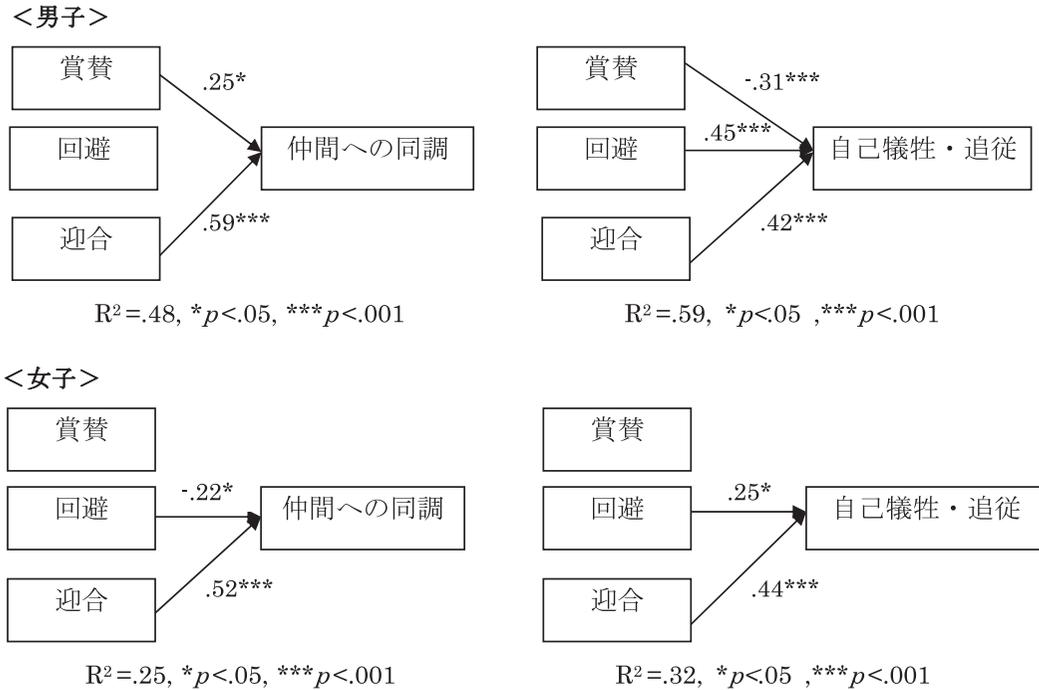


Figure. 2 対人欲求と同調行動の関連 (男女別)

標準化偏回帰係数)は正に有意な値 ( $\beta = .45, p < .001$ )であった。また、対人欲求の「迎合」の $\beta$ (標準化偏回帰係数)も正に有意な値 ( $\beta = .42, p < .001$ )であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .59$ であり、有意であった ( $F(3, 59) = 27.7, p < .001$ )。女子においては、対人欲求の「回避」において有意であり、 $\beta$ (標準化偏回帰係数)は正に有意な値 ( $\beta = .25, p < .05$ )であった。また、「迎合」においても有意であり、 $\beta$ (標準化偏回帰係数)は正に有意な値 ( $\beta = .44, p < .001$ )であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .32$ であり、有意であった ( $F(2, 71) = 16.6, p < .001$ )。したがって、同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は、男子は対人欲求の「賞賛」「回避」「迎合」、女子は対人欲求の「回避」「迎合」において有意であるといえる。

### 5. 親への信頼感タイプと性別、対人欲求及び同調行動の関連

次に、父母相互間への信頼感タイプによって同調行動に及ぼす対人欲求の影響について検討を行うため、相関分析を実施した (Table. 10)。

父母間の信頼関係のタイプは以下の方法で分類した。青年期の子どもが母親と父親に抱く信頼感を得点化し、それぞれの平均値からH群・L群に分け、各群の組み合わせから4群を構成した。第1の群は、母親・父親両者への信頼感得点がH群のもので、両者信頼群 (以下HH群,  $n = 66$ )とした。第2の群は、母親に抱く信頼感得点がH群、父親に抱く信頼感得点がL群のもので、母親信頼群 (以下HL群,  $n = 18$ )とし、第3の群は、母親に抱く信頼感得点がL群、父親に抱く信頼感得点がH群のもので、父親信頼群 (以下LH群,  $n = 13$ )とした。第4の群は、母親・父親両者への信頼感得点がL群であり、両者不信群 (以下LL群,  $n = 40$ )とした。

HH群の男子 ( $n = 28$ )では、対人欲求の「回

避」は同調行動の「自己犠牲・追従」と正の相関、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。HH群の女子 (n = 38) では、対人欲求の「回避」は同調行動の「自己犠牲・

追従」と正の相関、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。HL群の男子 (n = 4) では、データ数が少ないため相関関係が検討できなかった (Table. 10)。HL群の女子 (n

Table. 10 親への信頼感タイプと性別による対人欲求及び同調行動の相関関係

<b>HH, 男子(n=28)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	-.07	.06	.21	-.30
回避		—	.78**	.33	.74**
迎合			—	.61**	.69**
仲間への同調				—	.54**
自己犠牲・追従					—
** <i>p</i> < .01					
<b>HH, 女子(n=38)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.48**	.07	-.26	.12
回避		—	.55**	.20	.56**
迎合			—	.48**	.51**
仲間への同調				—	.49**
自己犠牲・追従					—
** <i>p</i> < .01					
<b>HL, 男子(n=4)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	-.04	.74	.73	.13
回避		—	.61	.47	.59
迎合			—	.94	.61
仲間への同調				—	.76
自己犠牲・追従					—
<b>HL, 女子(n=14)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.25	.45	.02	.08
回避		—	.05	.21	.29
迎合			—	.41	.54*
仲間への同調				—	.41
自己犠牲・追従					—
* <i>p</i> < .05					

**LH, 男子(n=11)**

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.51	.25	.38	-.34
回避		—	.70*	.36	.46
迎合			—	.44	.37
仲間への同調				—	-.25
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$

**LH, 女子(n=2)**

データ数不足のため相関関係なし

**LL, 男子(n=20)**

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.12	.39	.45*	.10
回避		—	.15	.38	.51*
迎合			—	.74**	.51*
仲間への同調				—	.51*
自己犠牲・追従					—

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

**LL, 女子(n=20)**

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.37	.22	.08	.42
回避		—	.13	.38	.54*
迎合			—	.48*	.54*
仲間への同調				—	.17
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$

= 14) では、対人欲求の「迎合」は同調行動の「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。LH群の男子 (n = 11), 女子 (n = 2) では、ともにデータ数が少ないため相関関係が検討できなかった (Table. 10)。LL群の男子 (n = 20) では、対人欲求の「賞賛」は同調行動の「仲間への同調」、対人欲求の「回避」は同調行動の「自己犠牲・追従」、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。LL群の女

子 (n = 20) では、対人欲求の「回避」は同調行動の「自己犠牲・追従」、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。

HH群, LL群の男女ごとに、対人欲求が同調行動に及ぼす影響をより具体的に検討するため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「回避」「迎合」を独立変数、同調行動の2つの下位尺度である「仲間への賞賛」「自己犠牲・追従」を従属変数としたステップワイズ重回帰

分析を行った(Table. 11 ~ 14, Figure 3 ~ 6)。HL群の女子において対人欲求と同調行動の相関関係はあったが、データ数が足りないことから一般的にそのような傾向があるとは言い難いと考え重回帰は行わなかった。また、相関関係がなかったHL群男子、LH群男女においても同様に重回帰を行うのに十分なデータ数でないため実施しなかった。

①HH群, 男子, 同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「迎合」においてのみ有意であり(Table. 11, Figure. 3),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .60, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .37$ であり, 有意であった ( $F(1, 26) = 15.0, p < .001$ )。

②HH群, 男子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」においてのみ有意であり(Table. 11, Figure. 3),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .74, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .55$ であり, 有意であった ( $F(1, 26) = 31.8,$

$p < .001$ )。

③HH群, 女子, 同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「賞賛」において有意であり(Table. 12, Figure. 4),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に優位な値 ( $\beta = -.29, p < .05$ ) であった。また、対人欲求の「迎合」においても有意であり(Table. 12, Figure. 4),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .50, p < .001$ ) であった。したがって、HH群の女子における同調行動「仲間への同調」に及ぼす影響は、対人欲求「賞賛」「迎合」において有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .31$ であり, 有意であった ( $F(2, 35) = 7.88, p < .001$ )。

④HH群, 女子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」においてのみ有意であり(Table. 12, Figure. 4),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .56, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .31$ であり, 有意であった ( $F(1, 36) = 16.5, p < .001$ )。

⑤LL群, 男子, 同調行動「仲間への同調」に

Table. 11 HH, 男子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数				R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合		
仲間への同調			.60***		.37***
自己犠牲・追従		.74***			.55***

\*\*\* $p < .001$

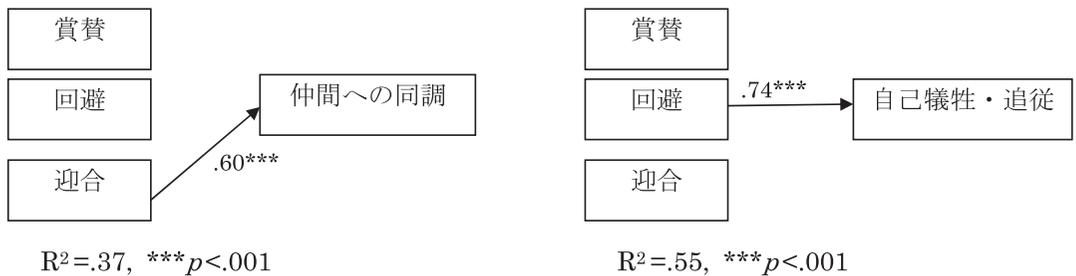


Figure. 3 HH, 男子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「迎合」においてのみ有意であり (Table. 13, Figure. 5),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .74, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .55$ であり, 有意であった ( $F(1, 18) = 21.8,$

$p < .001$ )。

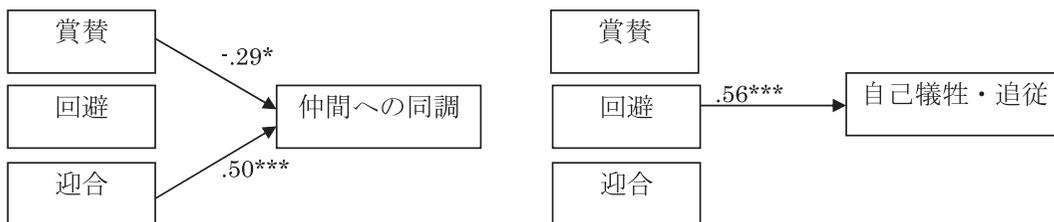
⑥LL群, 男子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」において有意であり (Table. 13, Figure. 5),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .45, p < .05$ ) であった。また,

Table. 12 HH, 女子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調	-.29*		.50***	.31***
自己犠牲・追従		.56***		.31***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$



$R^2 = .31, *p < .05$  \*\*\* $p < .001$

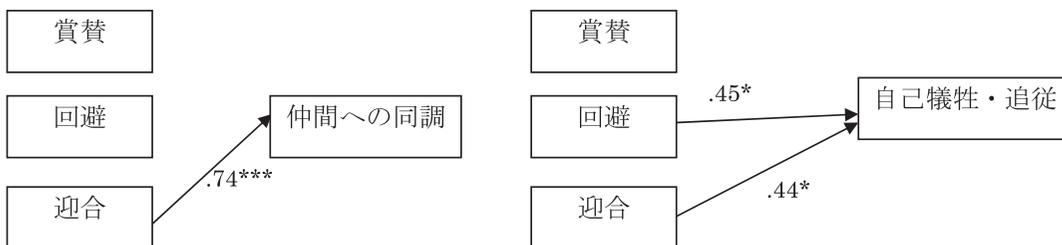
$R^2 = .31, ***p < .001$

Figure. 4 HH, 女子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

Table. 13 LL, 男子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調			.74***	.55***
自己犠牲・追従		.45*	.44*	.45**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$



$R^2 = .55, ***p < .001$

$R^2 = .45, *p < .05$

Figure. 5 LL, 男子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

Table. 14 LL, 女子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調		-.45*	.54**	.43**
自己犠牲・追従		.47*	.48*	.52**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

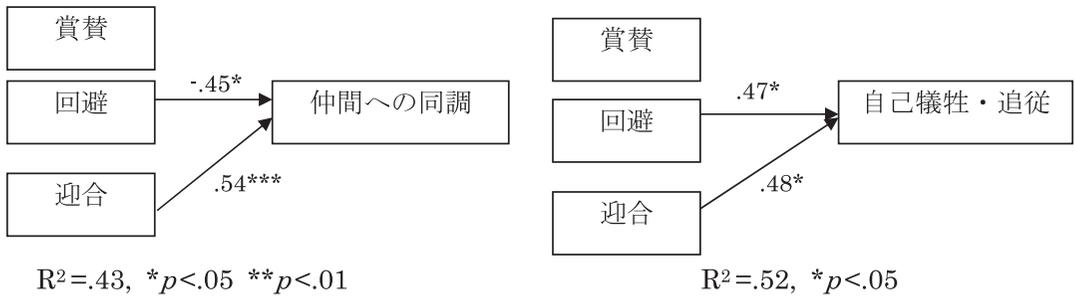


Figure. 6 LL, 女子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 13, Figure. 5),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .44, p < .05$ ) であった。したがって, LL群の男子における同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は, 対人欲求「回避」「迎合」において有意であった。なお, このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .45$ であり, 有意であった ( $F(2, 17) = 6.90, p < .01$ )。

⑦LL群, 女子, 同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」において有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に優位な値 ( $\beta = -.45, p < .05$ ) であった。また, 対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .54, p < .01$ ) であった。したがって, LL群の女子における同調行動「仲間への同調」に及ぼす影響は, 対人欲求「回避」「迎合」において有意であった。なお, このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .43$ であり, 有意であった ( $F(2, 17) = 6.52, p < .01$ )。

⑧LL群, 女子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」において有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .47, p < .05$ ) であった。また, 対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .48, p < .05$ ) であった。したがって, LL群の女子における同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は, 対人欲求「回避」「迎合」において有意であった。なお, このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .52$ であり, 有意であった ( $F(2, 17) = 9.01, p < .01$ )。

## V. 考察

本研究は, 青年期の両親への信頼感がどのように心理的側面・行動的側面に影響するかについて, 対人欲求および同調行動との関連から検討し, その際性別による影響も検討してきた。

### 1. 性別による対人欲求及び同調行動の関連

男子が積極的に他者の意見, 行動を受け入れる原因には, 賞賛欲求・迎合欲求が関係しているが, 回避欲求は関係していないといえる

(Table. 9, Figure. 2)。それに対し、女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因には、迎合欲求と回避欲求が関係しているが、男子とは異なり賞賛欲求は関係していないといえる (Table. 9, Figure. 2)。また、男女共に対人欲求の「迎合欲求」が同調欲求の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたことから、性別による影響はないと考えられる (Table. 9, Figure. 2)。

このことから、“男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、褒められたいという欲求があるからであって、そこに回避欲求は関係しない”といえる。鈴木・菅原 (2014) が承認欲求と種々のデモグラフィック要因について検討した結果、若年層において男女共に賞賛欲求が高く、且つ男子のほうが女子に比べ賞賛欲求が高く、回避欲求が低かったことが示唆され、その背景として男子のほうが積極的に社会にて活動することが求められることが多いので、より積極的な活躍を促進すると考えられる賞賛欲求が喚起されやすいからではないかと述べている。また、原田・青山 (2011) は、他者から褒められたい人は積極的に行動し、他者の注目を集め集団の中に自分の居場所・役割を確保しようとするとして述べている。

つまり、男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、社会において広い交友関係を求められるので、多くの他者から褒められ注目を集めることで、多くの居場所を確保したいという欲求が背景にあるためではないかと考えられる。回避欲求が関係してしまうと、他者との繋がりが途絶え、広い交友関係や多くの居場所を確保できないので、回避欲求が関係しなかったと解釈する。

それに対し、“女子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者との関係を維持したい欲求があるからであって、そこに賞賛欲求は関係しない”といえる。他者との関係を維持するということは、深く親密な関係を女子は望んでいるともいえる。小塩 (1998) は、深い友人関係は互いに気を使うことなく親密な

付き合いとなり、心理的安定感をもたらすので自尊感情が高くなると述べている。また、女子は共感して共鳴しあうといった他者と1つになるような関係を望み、他者と密着した関係をもつという (泉水・小池, 2011)。

つまり、女子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者と1つになるような親密な関係になりたいという欲求が背景にあるためといえる。また、このような関係を維持することによって心理的安定感をもたらされるので、女子は自尊感情が高いのではないかと考えられる。このような密着した対人関係のありかたは、浮いた存在になることを避け自分を守るために特定の人と密着していたいという女子特有の考えが関連していると解釈できる。賞賛欲求が関係しない理由としては、褒められ居場所・役割を確保することよりも、まずは親密な関係を維持することを女子は重視しているためと考える。しかしながら、安心感だけでなく嫌われたらどうしようといった不安感も共存していると思われ極めて不安定な状態である可能性もあるといえる。

男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、賞賛欲求、迎合欲求、回避欲求が関与しているといえる (Table. 9, Figure. 2)。一方で、女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求と迎合欲求が関係しているが、男子と異なり賞賛欲求は関与していないといえる (Table. 9, Figure. 2)。また、男女共に対人欲求の「回避欲求」「迎合欲求」が同調欲求の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていたことから、性別による影響はないと考えられる (Table. 9, Figure. 2)。

このことから、“男子が意見、行動を心から納得できない他者に対して自己を抑え表面的な同調行動を取るのには、他者から褒められたくないという欲求があるからである”といえる。男子は、先にも述べたが積極的に社会にて活動す

ることが求められるので、積極的な活躍を促進すると考えられる他者からの賞賛が重要となる(鈴木・菅原, 2014)。原田・青山(2011)が、他者から褒められたい人は積極的に行動し、他者の注目を集め集団の中に自分の居場所・役割を確保しようとする述べていることから、男子にとって賞賛は向社会的行動において必要であるといえる。また、泉水・小池(2011)によると、男子は他者と自分は異なる存在であるという認識を持ち合わせているという。

つまり、男子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取るのには、自分とは異なる考えを持った存在と認識した他者に褒められ、居場所・役割を確保したくないが、納得できない相手でも社会で活動を共有する相手になるかもしれないので、関わる際にはできるだけ摩擦を少なくするため自己を抑え同調しようという思いが背景にあるためと考えられる。

一方で、“女子は意見、行動を心から納得できない他者に対して自己を抑え表面的な同調行動を取る際において賞賛欲求は影響しない”と考えられる。女子が、意見、行動・態度を心から納得できない他者に対して、表面的な同調行動を取る際に賞賛欲求が関係しないのは何故だろうか。先にも述べたが、賞賛欲求が喚起されると人は積極的に行動し他者の注目を集めることで、集団の中に居場所・役割を確保しようとするという(原田・青山, 2011)。また、田村・石井(2014)によると、女子には“何かあった時に複数の他者から自分を支えてほしい”という思いがあるという。

つまり、女子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取る際において賞賛欲求が影響しないのは、何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思いがあるので、賞賛欲求が関係してしまうと自分の居場所・役割が納得できない他者との間に確保され、深い関係となり自己開示が求められ、何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思惑が気付かれ

てしまうのではないかとこの恐れが背景にあるためと考えられる。

男女ともに「仲間への同調行動」に及ぼす影響が「迎合欲求」と共通していたことから、今の大学生の男女において“他者に気に入られたい”という欲求が仲間への同調行動をする際に重要であるといえる。また、男女ともに「自己犠牲・追従」に及ぼす影響が「回避欲求」「迎合欲求」と共通していたことから、今の大学生の男女において“できれば関わりたくないが関わるのであれば気に入られたい”という欲求が自己犠牲・追従行動をする際に重要であるといえる。

## 2. 親への信頼感タイプと性別、対人欲求及び同調行動の関連

母親、父親を共に信頼している男子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因には、迎合欲求が関与しているが、賞賛欲求と回避欲求は関係していないと考えられる(Table. 11, Figure. 3)。また、母親、父親を共に信頼していない男子が積極的に他者の意見、行動・態度を受け入れる原因も、母親・父親を共に信頼している男子と同様の結果であった(Table. 13, Figure. 5)。

男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者に気に入られたいという思いがあるからであるという特徴は、母親・父親への信頼感の高低による影響(Table. 11, 13, Figure. 3, 5)、性別による影響ではないと考えられる(Table. 9, Figure. 2)。しかしながら、全被験者検討において男子は女子と異なり対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたにも関わらず(Table. 9, Figure. 2)、HH群、LL群の男子では、その影響がなかったことから(Table. 11, 13, Figure. 3, 5)、男子の両親への信頼感の高低は男子における特徴であった同調行動の「仲間への同調」に及ぼす影響である対人欲求の「賞賛欲求」の関与をなくすということが解釈できる。

このことから、“男子の母親、父親への信頼感の高低は、男子が他者の意見、行動・態度を受け入れ同調行動を取る際において賞賛欲求の関与をなくす”といえる。

Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論から、親への信頼感とは他者への信頼感に影響するといえる。つまり、母親・父親への信頼感が高い男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取る際において賞賛欲求が関与しないのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者との間には既に自分の居場所・役割を確保できているので、わざわざ居場所・役割を確保する行動を起こす必要がないという思いが背景にあるためであると解釈できる。あるいは、信頼している両親から褒められているので、賞賛欲求が満たされているため賞賛欲求が関係しない可能性も考えられる。また、母親・父親への信頼感が低い男子に他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取る際において賞賛欲求が影響しないのは、他者への信頼感が低く、信頼していない他者との間に自分の居場所・役割を確保しようとは思わないので、居場所・役割を確保する行動を起こす必要がないという思いが背景にあるためであると解釈できる。

また、対人欲求の「回避欲求」が同調行動の「仲間への同調」に関与していない特徴が全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) ・親への信頼感の検討 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5) の双方において、男子に共通して見られたことから、親への信頼感の高低に関係なく男子はやはり社会において広い交友関係を求められるので、回避欲求が関係してしまうと、他者との繋がりが途絶え、広い交友関係や多くの居場所を確保できないので、回避欲求が関与しなかったと解釈する。

母親、父親を共に信頼している男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求が関係しているが、賞賛欲求と迎合欲求は関係していないと考えられる (Table. 11, Figure. 3)。また、母親、父親を

共に信頼していない男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求と迎合欲求が関係しているが、賞賛欲求は関係していないと考えられ (Table. 13, Figure. 5)、迎合欲求が関係しているところは、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) における男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因と同じであった。

男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取るのには、他者との関係を回避したいがそれができない場合には自己を抑えるという思いがあるからであるという特徴は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) ・母親、父親への信頼感の高低による検討 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5) でも見られたことから、母親、父親への信頼感の高低、性別による影響ではないと考えられる。しかし、全被験者検討において男子は女子と異なり対人欲求の「賞賛欲求」が同調欲求の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていたにも関わらず (Table. 9, Figure. 2)、HH群、LL群の男子では対人欲求の「賞賛欲求」が同調欲求の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていなかったことから (Table. 11, 13, Figure. 3, 5)、母親・父親への信頼感の高低は男子における特徴であった同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響である対人欲求の「賞賛欲求」の関与をなくすということが解釈できる。また、対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は全被験者検討では見られなかったが (Table. 9, Figure. 2)、両親への信頼感の高低によって対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響に差が見られた (Table. 11, 13, Figure. 3, 5)。このことから、“男子の母親、父親への信頼感の高低は、男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取る際において、賞賛欲求の関与をなくす・男子の母親、父親への信頼感の高さは迎合

欲求の関与をなくす”といえる。

先にも述べたが、Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論から、親への信頼感は他者への信頼感に影響するといえる。また、森下・三原 (2015) によると、親との信頼感によって形成された内的作業モデルは幼少期に形成されるとしても、それは生涯変わらないというような固定したものではなく、その後に関係や体験を通じ、徐々に変容するものであるという。

つまり、母親・父親への信頼感が高い男子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取る際に賞賛欲求と迎合欲求が関与しないのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者との間には既に自分の居場所・役割が確保されており、信頼しているから他者も自分のことを信頼している・気に入ってくれていると思うので、わざわざ居場所・役割を確保する行動や気に入られようとする行動を起こす必要がないという思いが背景にあるためであると解釈できる。母親・父親への信頼感が低い男子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取る際に賞賛欲求が影響しないのは、他者への信頼感が低く、信頼していない他者との間に自分の居場所・役割を確保しようとは思わないので、居場所・役割を確保する行動を起こす必要がないという思いがあるためと解釈できる。男子における両親への信頼感の低さは自己犠牲・追従の際における賞賛欲求の関係をなくす一方で、“男子の母親、父親への信頼感の低さは、迎合欲求と自己犠牲・追従に影響を及ぼしにくい (Table. 9, 13, Figure. 2, 5)” といえ、男子において親への信頼感が迎合欲求、自己犠牲・追従に影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

母親、父親を共に信頼している女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因には、賞賛欲求と迎合欲求が関係しているが、回避欲求は関係していないと考えられる (Table. 12, Figure. 4)。一方、母親・父親を共に信頼していない女子が積極的に他者の意見、行動を受け

入れる原因には、回避欲求と迎合欲求が関係しているが、賞賛欲求は関与していないと考えられ (Table. 14, Figure. 6)、この結果は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) における女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因と同じ対人欲求内容が関係していた。

女子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者に気に入られたいという思いがあるからであるという特徴は、母親・父親への信頼感の高低による影響 (Table. 12, 14, Figure. 4, 6)、性別による影響ではないと考えられる (Table. 9, Figure. 2)。しかし、性差の検討において、女子は男子と異なり対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」に及ぼす影響は見られなかったにも関わらず (Table. 9, Figure. 2)、HH群の女子において対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」に負の影響を及ぼしていたことから (Table. 12, Figure. 4)、女子において親への信頼感が高い場合において、対人欲求の「賞賛欲求」は同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼすと考えられる。また、全被験者検討において、女子は男子と異なり対人欲求の「回避欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたにも関わらず (Table. 9, Figure. 2)、HH群の女子において対人欲求の「回避欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていなかったことから (Table. 12, Figure. 4)、両親への高い信頼感が高い場合において、女子は対人欲求の「回避欲求」は同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼさなくなると考えられる。

このことから、“女子の母親、父親への高い信頼感には、女子が積極的に他者の意見、行動・態度を受け入れる際において、賞賛欲求の低下を生じさせ、回避欲求の関係をなくす”といえる。

Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論から、親への信頼感は他者への信頼感に影響するといえる。また、賞賛欲求が喚起されると人は積極的に行動し他者の注目を集めることで、集団の中に居場所・役割を確保しようとするという (原

田・青山, 2011)。

つまり、女子の母親・父親への高い信頼感が積極的に他者の意見、行動を受け入れる際において原因となる賞賛欲求の低下を生じさせるのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者との間には既に自分の居場所・役割が確保されている、あるいは、信頼している親から十分に褒められているので、他者から褒められることで注目を集め、集団の中に居場所・役割を確保したいという自身の欲求を満たす必要がないからであると解釈できる。また、母親・父親への信頼感が高い女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる際において回避欲求が関係しないのは、他者への信頼感が高いので、共感して共鳴しあうといった他者と1つになるような関係が既にできている・信頼している他者との関係を回避したいとは思わないためであると解釈する。

一方、母親・父親を共に信頼していない女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる因果関係が (Table. 14, Figure. 6), 全被験者女子と同じ因果関係であったことから (Table. 9, Figure. 2), “女子の母親、父親への信頼感の低さは、対人欲求 (賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求) と同調行動 (仲間への同調) に影響を及ぼしにくい” といえる。男子は母親・父親への信頼感の低さが対人欲求と積極的に他者の意見、行動・態度を受け入れる行動といった仲間への同調行動に影響を及ぼしているにも関わらず (Table. 13, Figure. 5), 女子において親への信頼感が影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

母親、父親を共に信頼している女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求が関係しているが、賞賛欲求と迎合欲求は関係していないと考えられる (Table. 12, Figure. 4)。それに対し、母親・父親を共に信頼していない女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求と迎合欲求が関与しているが、賞

賛欲求は関与していないと考えられ (Table. 14, Figure. 6), この結果は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) における女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因と同じ対人欲求内容が関係していた。

女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取るのには、他者との関係を回避したいがそれができない場合には自己を抑えるという思いがある、そして、賞賛欲求が関係しないという特徴は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2)・母親、父親への信頼感の高低による検討 (Table. 12, 14, Figure. 4, 6) でも見られたことから、母親、父親への信頼感の高低、性別による影響ではないと考えられる。しかし、対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響が全被験者検討では見られたが (Table. 9, Figure. 2), HH群の女子ではその影響がなかったことから (Table. 12, Figure. 4), 両親への信頼感が高い場合において女子は、同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響である対人欲求の「迎合欲求」の関与をなくすと考えられる。

このことから、“女子の母親、父親への高い信頼感、女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取る際において、迎合欲求の関与をなくす” といえる。

Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論によると、親への信頼感是他者への信頼感に影響するといえることから、母親・父親への信頼感が高い女子が他者の意見、行動・態度を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取る際において迎合欲求が関係しないのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者も自分のことを信頼している・気に入ってくれていると思うので、気に入られたいという思いが湧かないためであると解釈できる。

一方、母親・父親を共に信頼していない女子が他者の意見、行動を心から納得していないに

も関わらず表面的に他者と同じ行動を取る因果関係が (Table. 14, Figure. 6), 全被験者女子と同様の因果関係を示したことから (Table. 9, Figure. 2), “女子の母親, 父親への信頼感の低さは, 対人欲求 (賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求) と同調行動 (自己犠牲・追従) に影響を及ぼしにくい” といえる。男子は母親・父親への信頼感の低さが対人欲求と表面的な同調行動といった自己犠牲・追従に影響を及ぼしているにも関わらず (Table. 13, Figure. 5), 女子において親への信頼感が影響を及ぼさないのはなぜなのか, 更なる検討が今後必要になってくるであろう。

また, 対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に関係しない特徴が全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2), 両親への信頼感の検討 (Table. 12, 14, Figure. 4, 6) の双方において女子に共通して見られたことから, 両親への信頼感の高低に関係なく女子には, 先にも述べたが “何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思いがある” という特徴があるので, 賞賛欲求が関係してしまうと自分の居場所・役割が納得できない他者との間に確保され, 深い関係となり自己開示が求められ, 何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思惑が気付かれてしまうのではないかとこの恐れが背景にあるためと考えられる。

男女ともに “他者の意見, 行動を受け入れ同調行動を取るの, 他者に気に入られたいという思いがあるから” という特徴が, 母親・父親への信頼感の高低による影響 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5), 性別による影響 (Table. 9, Figure. 2) でも見られたことから, 母親・父親への信頼感の高低に関係なく, 今の大学生の男女において “他者に気に入られたい” という欲求が仲間への同調行動をする際に重要であるといえる。

また, 男女ともに “他者の意見, 行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取るの, 他者との関係を回避した

いがそれができない場合には自己を抑えるという思いがあるから” という特徴が, 母親, 父親への信頼感の高低による影響 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5), 性別による影響 (Table. 9, Figure. 2) でも見られたことから, 母親・父親への信頼感の高低に関係なく, 今の大学生の男女において “納得できない他者との関係は避けたい” という欲求が自己犠牲・追従行動をする際に重要であるといえる。

## VI. おわりに

青年期の両親への信頼感がどのように心理的側面・行動的側面に影響するかについて, 対人欲求および同調行動との関連から検討し, その際性別による影響も検討してきた。

男女という性別が, 対人欲求及び同調行動に及ぼす影響に違いを生じさせることがわかった。男子が「仲間への同調」を取るのには褒められたいからであって, 女子とは異なり関係を維持したい・回避したいという欲求は関与しないことがわかり, 女子が「仲間へ同調」を取るのには関係を維持し親密な関係になりたいからであって, 男子とは異なり褒められたいという欲求は関与しないということがわかった。また, 男子が「自己犠牲・追従」を取るのには褒められたいという思いがない時であって, 女子は「自己犠牲・追従」の際に男子とは異なり賞賛欲求が関与しないということがわかった。

次に, 両親への信頼感が対人欲求及び同調行動に及ぼす影響が見られるか検討を行った。HL群・LH群においてはデータ不足のため, 今回検討が行えなかったため, 今後データ数を増やし検討を行う必要があるであろう。

男子において両親への高い・低い信頼感は「仲間への同調」を取る際に「賞賛欲求」の関与をなくすことがわかった。また, 男子において両親への高い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際に「賞賛欲求」「迎合欲求」の関与をなくすこと, 男子において両親への低い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際に「賞賛欲求」の関与

をなくすことがわかった。しかし、男子の母親、父親への信頼感の低さは、迎合欲求と自己犠牲・追従に影響を及ぼしにくいことがわかり、影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

一方、女子において両親への高い信頼感は「仲間への同調」を取る際に「賞賛欲求」の影響を生じさせ、「回避欲求」の関与をなくすことがわかった。しかし、女子において両親への低い信頼感が対人欲求（賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求）と仲間への同調に影響を及ぼしにくいことがわかり、女子において両親への信頼感の低さが影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。また、女子において両親への高い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際に「迎合欲求」の関与をなくすことがわかった。しかし、女子において両親への低い信頼感が対人欲求（賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求）と自己犠牲・追従に影響を及ぼしにくいことがわかり、女子において両親への信頼感の低さが影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

全体を通し、男女ともに対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたことから、母親・父親への信頼感の高低による影響、性別による影響ではないと考えられる。今の大学生の男女において“他者に気に入られたい”という欲求が仲間への同調行動をする際に重要であると解釈できるが、なぜ現代の大学生男女は仲間への同調行動をする際に他者に気に入られたい欲求があるのか、今後更なる検討が要るだろう。また、男女ともに対人欲求の「回避欲求」が「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていたことから、母親・父親への信頼感の高低による影響、性別による影響ではないと考えられる。今の大学生の男女において“できれば関わりたくない”という欲求が自己犠牲・追従行動をする際に重要であると解釈した。やはり、納得のできない他者との関係は男女ともに避けたいようである。

さらに、女子においては対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」に関係しないという特徴が、全被験者検討で見られたことから、女子にとって同調行動の際に「賞賛欲求」は重視していないといえるが、両親への信頼感によって重視されることもあることがわかった。また、男子においては対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」において重要であったが、両親への信頼感によって「賞賛欲求」は重視されなくなることがわかった。

本研究において、仮説とはやや異なる結果となったが、両親への信頼感是对人欲求及び同調行動に影響を及ぼすことがわかった。また、上記で挙げた以外の今後の課題として以下のことをあげる。本研究において、大学生を対象に質問紙調査を行ったが、親元を離れ一人暮らしをしている学生も多数いるかと思われる。また、離婚家庭においては一人親の場合もあるであろう。よって、母親・父親への信頼感を想起するのが難しかった学生もいるのではなかろうか。その点を考慮し、今後は家族との同居の有無・親の離婚の有無といったデモグラフィック要因に着目した研究が必要となるであろう。さらに、母親もしくは父親のみを高く信頼している場合の影響も調べる必要があるといえる。

## 謝 辞

修士論文の執筆にあたり、お忙しい中丁寧なご指導・ご指摘をしていただいた指導教授である小田切紀子教授に心より感謝致します。

副査を引き受けてくださった大矢泰士准教授に厚くお礼を申し上げます。

また、質問紙調査に協力してくださった東京国際大学小田切紀子教授、大矢泰士准教授、および貴重な講義時間を割いてくださった学生の皆様に深く感謝致します。

最後に、質問紙調査時に配布を手伝って頂いたゼミの皆様、辛い時に心の支えになって下さった同期の皆様、本当にありがとうございます。

## 引用・参考文献

- 青木多寿子・竹嶋飛鳥・戸田真弓・谷口弘一 (2007). 両親の養育態度, 生活体験が小学生の社会的スキル, 生活充実感に及ぼす影響. 広島大学大学院教育学研究科紀要1 (56), 21-28.
- Bowlby, J (1973). Attachment and loss. Vol. 2: Separation: Anxiety and anger. New York: Basic Books. 黒田実朗 (訳) (1977). 母子関係の理論Ⅱ——分離不安——. 岩崎学術出版社.
- 張 愛子 (2014). 大学生の自己愛傾向に関する研究——親の養育態度と友人関係との関連から——. 学校教育学研究論集 (29), 1-13.
- 浜崎隆司・田村隆宏・吉田和樹・吉田美奈・岡本かおり・安藤ときわ・倉成正宗 (2012). 親子の信頼関係尺度に関する予備的研究. 鳴門教育大学研究紀要 (27), 2012.
- 原田克己・青山智恵 (2011). アサーションと対人感情・対人欲求との関連. 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 (3), 15-30.
- 橋本泰子 (2010). 大学生における父親との愛着関係と社会性に関する一考察——愛着尺度・EQT・SWT・WXT——. 心理学研究, 創刊号, 92-103.
- 五十嵐透子・野村珠紀・岩崎真和 (2014). 大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連. 上越教育大学研究紀要 (33), 107-114.
- 石橋茉奈・石田 弓 (2013). 中学生の養育者への信頼感と攻撃性の関連. 広島大学心理学研究 (13), 171-190.
- 石田靖彦・中村友一 (2013). 中学生のいじめ体験に関する研究——いじめの立場における心理的特徴——. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 (3), 123-130.
- 泉 玲・石田 弓 (2012). 特定の他者ごとに特有な内的作業モデルを想定した愛着スタイルと対人不安の関連の検討. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 (11), 55-70.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連. 社会心理学研究 (3) 22, 274-284.
- 金政祐司 (2009). 青年期の母——子ども関係と恋愛関係の共通性の検討——青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就——. 社会心理学研究 (1) 25, 11-20.
- 姜 信善・南 朱里 (2014). 友人関係満足と信頼感および個人志向性・社会志向性との関連: 性差に焦点を当てて. 富山大学人間発達科学部紀要9 (1), 17-33.
- 葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動. 鳴門教育大学研究紀要 (25), 189-202.
- 金 美伶 (2006). 青年期の同一性形成に影響を及ぼす重要な他者との関係性. 人間文化論 (9), 325-333.
- 小林 真 (2011). 中学校時代の両親の養育態度が青年期の友人関係のあり方に及ぼす影響——自己概念を媒介変数として——. とやま発達福祉学年報 (2), 21-28.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 日本教育心理学研究 (46), 280-290.
- 廣崎 陽・瀬戸美奈子 (2013). 青年期における完全主義が学校への適応感に及ぼす影響. 三重大学教育学部研究紀要 (64), 教育科学2013, 239-246.
- 松永真由美・岩元澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究. 久留米大学心理学研究 (7), 77-86.
- 松寄洋子 (2008). 小学校から中学校への移行期における友人関係. 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇) 8, 213-219.
- 三輪雅子・三浦正江・上里一郎 (1999). 大学生のシャイネスと信頼感, および精神的健康の関連性の検討. ヒューマンサイエンスリサーチ (8), 121 ~ 137.
- 森下正康・三原まどか (2015). 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響——内的作業モデルと自己受容を媒介として——. 発達教育学研究 (9), 31-42.
- 中間玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義. 兵庫教育大学研究紀要 (44), 9-21.
- 野中公子・永田俊明 (2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響——体験の時期と発達の関連——. 九州看護福祉大学紀要12 (1), 115-124.
- 大鷹円美・菅原正和・熊谷 賢 (2009). 母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 (8), 119-129.
- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係——内的作業モデル尺度作成の試み——. 性格心理学研究2 (9), 59-70.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・

- 北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. 教育心理学研究 (50), 12-22.
- 酒井 厚 (2005). 対人信頼感の発達——児童期から青年期へ——. 川島書店.
- 坂田美和子・横川和章 (1998). 思春期・青年期における信頼感に関する研究——依存欲求及び特定の他者の存在からみた信頼感の再確立の可能性——. 日本教育心理学会総会発表論文集 (40), 8.
- 泉水清志・小池庸生 (2011). 現代青年の友人関係に及ぼす要因. 育英短期大学研究紀要 (28), 23-32.
- 菅原正和・田村和香奈・嶋野重行 (2005). 青年期の信頼感形成に及ぼす心理学的要因. 岩手大学教育学部研究年報 (64), 39-52.
- 鈴木公啓・菅原健介 (2014). 承認欲求と種々のデモグラフィック要因——性別, 年齢, 体系, 結婚, そして職業——. 東京未来大学研究紀要 (7), 89-99.
- 武田裕子・石田 弓 (2013). 青年期における両親への相談行動について——利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて——. 広島大学心理学研究 (13), 191-209.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. 教育心理学研究 (52), 310-319.
- 竹村和久・高木 修 (1988). “いじめ”現象に関わる心理的要因——逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性——. 教育心理学研究 (1) 36, 57-62.
- 田村未来・石井 徹 (2014). 友人付き合いにおけるグループ志向の構造. 社会文化論集, 島根大学法文学部紀要, 社会文化学科編 (10), 27-41.
- 田中花香理 (2013). 他者依存性がソーシャル・サポートのストレス緩衝効果に及ぼす影響. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 (12), 90-99.
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. 日本パーソナリティ心理学会2005, 2 (13), 156-169.
- 田島祐奈・山崎洋史・岩瀧大樹 (2015). 青年期における対人欲求および同調行動に関する研究. 学苑・人間社会学部紀要 (892), 105-111.
- 富永幹人・田中あゆみ (2014). 青年期における学校段階の移行と親友人との友人関係——親友人に求める理想と現実およびそのズレの検討——. 福岡女学院大学紀要, 人間関係学部編 (15), 29-35.
- 上山喜寛・米澤好史 (2006). 他者による自己評価意識尺度作成の試み——対人欲求・対人ストレスとの関係——. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 (16), 135-144.
- 渡部玲二郎 (1999). 対人関係能力と対人欲求の関係. 心理学研究2 (70), 154-159.
- 山本彩留子・岡本裕子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性. 広島大学心理学研究 (8), 107-120.
- 山下美実子・石 玲・桂田恵美子 (2010). 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討. 臨床教育心理学研究 (36), 21-26.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012). いじめの被害——加害経験と自尊感情との関係——大学生を対象とした遡及的調査研究——. 「人間科学研究」文教大学人間科学部 (34), 169-182.